

KANT

GLOCAL

グローバル関東

Vol.2 January 2009

Special Features

多様な「表情」を持つ千葉

KANTO GLOCAL

グローバル関東

Vol.2 January 2009

CONTENTS

- 02 MESSAGE **千葉の魅力を再発見**
- 04 座談会 **千葉の魅力とこれからへの期待**
- 12 特集1 **街を育む ～ユーカリが丘の街づくり～**
- 16 特集2 **人を呼び込むいなかぐらし**
- 20 特集3 **新たな観光資源としての
京葉臨海コンビナート**
- 22 坂東の原風景
- 24 LOHASな土木
- 26 業務インタビュー 技術人に聞く
- 28 関東支部活動紹介／事務局だより
- 29 地域委員会だより／編集後記

CHIBA WITH MANY FACES

多様な「表情」を持つ

特集

Special Features

千葉

千葉県の大部分は、三方を海に囲まれた房総半島に属している。この様な地勢を生かした農漁業も盛んに行われ、農業産出額、漁業総生産量とも全国有数の地位を誇っている。また、首都圏の一角をなすことで、人口の密集地を抱える一方、農村部では人口減の問題に直面している。さらに、旧来の上総国・安房国・下総国から成り立ち地域によってその風土は異なっている。こうした背景を持つ千葉県の特性とその多様な風土が織り成す“表情”を紹介する。





インタビュー

千葉の魅力を再発見

俳優 永島 敏行

僕は、子供の頃から東京湾の近くで育ってきたけど、高度経済成長の中で千葉、特に東京湾側というのは大きく変わりました。たった四〇年ほどの間にこんなにも早く世の中が変わっていくのかという驚きがあります。急速に都市化が進んだことで、効率的で便利な千葉になっていった訳ですが、ここに来て思うのは非効率ならではの良さもあることです。

よく千葉を車で走るんですが、非効率な道路の走り方でしか分からない良さってあると思うんです。カーナビを使って走っているのは絶対に気がつかない、例えば道の奥まったところや、わき道やなんかに、体験型の農家とかあったり、意外な面白いものって隠れているんです。そういう発見を求めて、ほんの三〇分遠回りをしてみる、これって決して無駄な時間じゃなくて、実は価値ある時間なんです。

これからの時代は、効率的な世の中の一

歩先、元々人間が昔から持っている本来の生き方との融合というのが行われていく時代なのかなと感じています。

僕は、千葉市の蘇我という海がいつも近くにある環境で育ちました。昔の魅力を知っているからこそ特に海についてはそう思いますね。

意外と知られていないんですが、今、東京湾ですごくたくさん魚が獲れているんです。工場排水の規制や企業努力の結果、水がきれいになってきたからなのですが、将来的には、東京湾は、周りに住んでいる人が自給自足できるくらいの宝の海だと言う地元の漁師さんもいます。そう考えると千葉って、東京ディズニーランドも成田空港もあって東京から近いし、気候もいいし、なにより豊かな海に囲まれている。いっぱい宝を持っているんです。

そのなかでも国際化のますます進むこれからの時代、やっぱり成田空港があるって

いうのはとても大きいことですよね。外国から日本に来てくれる人にとっては、千葉が日本の玄関口になるってことですし、日本の良さを知ってもらおうという意味では、ものすごく大事な県じゃないかなって思うんですよ。今は、成田空港に着いた外国人の人たちはすぐ東京に向かってしまつて、千葉を通り過ぎてしまうことが多いと思う。でも、たくさん魅力を持っている千葉を通り過ぎちゃうなんてもつたない話ですよ。遠回りの話じゃないけど、少し余計に時間が掛かっても千葉を見て貰うような工夫、そういうのが欲しいな。

千葉県には、利根川水系や印旛沼などの水のいいところがある、銚子のような漁港、芝山とか成田というお寺を中心とした昔からの農村地帯と人間の暮らししている文化がある。素朴な価値あるもの、発見する喜び、そういうものを外国の人たちにプロモーションできる至近距離にあるのが千葉県なのです。そして、知ってもらうためには、もう少し人が滞留できるような工夫が必要だと思う。それは、新しいものを作っていくことじゃなくて、地元の人を探り出すことじゃないかな。

ところが、地元の人ってどうしても東京を見ちゃう、東京じゃなくてもっと足下の千葉を見て欲しいなと思うんですよね。そこに本当に魅力的なものがたくさん隠れている。そういう地域に眠っているいいものの探し方、見せ方って、僕らじゃなかなか



木更津の海

わからないけどデザインとか建設の方って知ってるんじゃないかな。千葉の隠れた魅力がもつと表に出てきて、ちよつと寄り道するとたくさん発見がある、そんなふうになつてくれたらもつと楽しい街になると思うな。



永島 敏行 プロフィール
(ながしま としゆき)

一九五六年十月二十一日生まれ、千葉県出身。千葉市立千葉高等学校を経て、専修大学文学部人文学科卒業。俳優として、映画・テレビ・ラジオ・舞台などで幅広く活躍中。ライフワークで米作りに参加。農業に強い関心があり、定期的に青空市場を開催している。米作りを題材にした映画にも出演。

司会——まずは簡単な自己紹介がてら、皆さんが持っている千葉のイメージをお聞かせ願います。

今井——私の携わった映画『ポストマン』のテーマでもあります。千葉は東京から一番近いふるさとというイメージがあります。今回の映画では懐かしさといふところか、家族というものを中心に描きたかったのです。それを東京から一番身近に感じられるところが千葉でした。それと、主役の長嶋一茂さんのお父様がもともと千葉出身という縁もあり、今回は県内のあちこちでロケをさせていただきました。

一言でいえば、千葉は都会と自然がうまく共有している身近な街であると思っています。

木下——私は千葉大学にて造園系の学生に都市計画を教えています。千葉は日本全体の縮図のようだと思うっています。大都市もあれば、ふるさとが感じられる素朴な農村部もあります。農村部は高齢化などの課題は抱えています。農業産出額は北海道、鹿児島県に次いで日本で三位という底力もあり、頑張っているのではないのでしょうか。

県内の山間部は高くはありませんが、木更津にある盤洲干潟から小櫃川を上って古い城下町の久留里まで行くと紅葉が綺麗な山が広がっています。しかし、そんな山間部に産廃処理場があったりするのも千葉の一面です。また、多くの植生を有しており、貴重な自然の宝庫でもあります。

縄文期の千葉の植生は非常に豊かで、仮説ですが世界のなかでもかなりの人口密度だったのではないかと考えられています。

そういった面で千葉は日本の縮図でもあり、今後の日本をどうしたいかを考えたときも千葉がモデルになり、それを考える素材が揃っていると思います。

座談会

千葉の魅力とこれからへの期待

今井和久 木下 勇 水澤千秋 影山美佐子

2008年10月29日(水) 於：ハーモニーホール2階特別室

ただ、海外で「千葉はどこだ」とよく聞かれます。「成田空港のあるところだ」と言うのと分かってもらえるのですが、成田空港は千葉という名前がなく、東京の成田空港であり、残念ながら東京に付属している千葉県という感触は否めません。これからは、東京に食らいつきながらも独自性を示していくことが課題かと思っています。

水澤——私は県庁の商工労働部で観光の担当をしております。ある時、新聞社のインタビューがあり、「千葉県というのはこれといった観光地がないですね」と言われました。確かに全国ブランドの観光地は少ないのです。しかし、私が東京足立区に住んでいたときの臨海学校は千葉の岩井海岸でしたし、船橋ヘルスセンターなど、よく千葉には来ていました。千葉の観光というイメージが沸かないのかもしれませんが、身近な行楽地がたくさんあります。実際には、県外の多くの皆さんが千葉に足を運んでいるのではないかと思います。

これからは行楽地のようなイメージも大事にしつつ、皆さんがもう少し千葉に自分の好きな場所を見つけてくれると良いですね。

影山——今の仕事は、コンベンションの誘致、国際交流の推進、そしてフィルムコミッションの運営などです。

「千葉と言ったら？」と聞かれたときに、有名なのはデイズニールゾート、成田空港、幕張メッセ、少し前までは九十九里の海水浴場です。海水浴の人口はどんどん減って淋しいのですが、逆に海のレジャーは広がっていて、ヨットやダイビングや他のスポーツも盛んになってきています。

千葉は京葉工業地域があつて工業も盛んですし農業も盛んです。例えば、野田は全国でも有数の枝豆の生産地とか、なかなか知られていない隠れた魅力がたくさんあり、可能性と多様性に富んだ

地域ではないかと思っています。

私たちは世界に向けて千葉を売る仕事をしていきますが、外国の方々からは「チャイバ」と読まれたり、「チャイナ」の間違いかと思われたりします。木下教授がおっしゃった通り「東京の隣で成田空港があつて」という言い方をしないと、なかなか分かってもらえません。

私のイメージでは、千葉は首都圏の人にとって、近くてすぐ行けるリゾート地です。北海道のような大自然ではないけれど、なんとなく心が和むような里山や里海だと思います。

映像で描かれる千葉

司会——千葉の景色は都会的なものから自然まで多種多様で、それ故に多くの映画やドラマのロケ地となっています。今回の座談会を企画するに当たり「千葉で撮っている映画はいろいろあるけれど、千葉そのものが舞台となっている映像があまりない」というお話を伺いましたが、その点映画『ポストマン』は、千葉そのものを舞台にした映画であるご紹介いただきました。

今井——私はテレビドラマもやっていますが、都内では撮影がしにくくなっています。しかし、千葉は幕張などの都会的なシーンも撮影できますし、漁村や農村をはじめとする場所は日本の田舎やふるさとも感じさせてくれ、そういった意味で様々なシーンを撮影しやすい土地です。現在、携わっているドラマも幕張を使わせていただいております。かなり千葉にお世話になっていきますね。

『ポストマン』に限っていうと、主役が長嶋さんで千葉というイメージがありました。また、我々の世代が思い出す懐かしさを今の子供たちにも感じて欲しいと思っています。「昔はこうだったのだ」「昔の匂いが今もあるよ」ということ



■南房総市千倉町の花畑（写真提供 千葉県）

を伝えられる場として、千葉は私のイメージが沸いた土地でした。

司会——一方、影山理事は、映像を撮りたいという今井監督のような方々に千葉を紹介する立場ですが、どの様にロケ地を紹介しているのでしょうか。

影山——私たちがフィルムコミッションの仕事が始めたのは二〇〇二年からです。それまでも私たちはコンベンションの誘致の仕事をしていました。コンベンションは会議の主催者に合わせてキメ細かくオーダーメイドでつくります。フィルムコミッションの仕事も、オーダーメイドで一つずつ違うので、そういう点が似ていると思います。

例えば、同じ海でもイメージされているのが波の荒い海なのか、穏やかな海なのか、工場が見えるような海なのか、それによって全然表情が違ってきます。私たちはそれぞれの監督や制作者が思い描くものに近いところをご紹介したいと思っています。それには、私たちが持っている情報だけではなく、県や市町村の持つ身近な情報とうまく連携ができると良いと思っています。

水澤——確かに千葉での撮影は多いのですが、それが千葉とはつきりわかるようなシチュエーションで撮影して頂ける場面があまり多くないので。そういった意味で、『ポストマン』は本当に嬉しい作品です。

この作品を観て一番感激したのは、地元の人だと思っています。自分の住む地域の魅力に気付いていない人は、映画を観て「オレってこんなところに住んでいたのか」と改めて感じたのではないかと思います。地元の人には案外その土地の良さに気付かないものですし、外から「良いところですね」と言っても「昔から知っているよ」という意識が強いようです。そういった意味で、本作品は全国の方に千葉の魅力を発信していただいたので、感謝していますし、これからも期待しております。

ただ、私たちは『ポストマン』の舞台がこれほど千葉を前面に出したものであることを封切後に気がついたので、知るのがちょっと遅かった気がしました。もう少し全体的にムードを高めてから封切りに持って行きたかったですね。

司会——木下先生は街づくりの観点から、どうやって千葉の魅力を活かしていけば良いとお考えですか。

木下——現在、大学と地域が連携して、共生環境による房総半島活性化をテーマに教育プログラムを展開しています。これを始めるに当たって千葉県と相談し、景観づくりという点で紹介された自治体がいすみ市です。その後、市の職員の方とプロモーションの話を進めていくなかで、話題にあがってきたのがいすみ鉄道です。この鉄道は、黄色い車両が一両で走るローカル線で、そのゆったりとした車窓から見える風景をある学生は、「失恋して傷心を癒す風景」であると提案していました。

スイスの事例をいえば、ローカル線は山間部の振興策として位置付けられていますし、付随していろいろなテーマの散歩道が整備されています。ローカル線に乗る、その地の植物を観察する、民家も見ると、それぞれのテーマでサインもガイドブックもしっかり整備されています。歩いて疲れたら一時間に一本のダイヤが組まれている鉄道に乗る。こうして、うまく鉄道とその土地がクロスし、アルプスの麓の何でもない農村部が支えられているのです。

そういうイメージを描きながら、学生たちといすみ鉄道沿線の昔ながらの散歩道や景観スポットを調べ、見つけていきました。それから、地域の人たちの生活風景を見て、その良さを評価することで、地域が元気になるという景観づくりをしていくのです。



今井和久

映画監督



木下 勇

千葉大学園芸学部教授



水澤千秋

千葉県商工労働部理事



影山美佐子

財団法人ちば国際コンベンションビューロー理事・事務局長

影山——今、お話に出たいいすみ鉄道も『ポストマン』の撮影に使われており、時間がゆっくり流れているという感じがして、温かみのある風景として映し出されていましたね。

木下——例えば、『ポストマン』の撮影地に使われた外房の太東崎の菜の花のシーンなどは、そこが撮影地となれば景観のスポットになりえます。それは、地域の人たちの景観を守るという意識啓発には非常に有力な材料となります。そういう景観づくりの例として北海道の美瑛町でコマリシヤルに使われた景観を守るという取り組みが行われています。

水澤——映画では太東崎の菜の花の向こうに灯台が見えるシーンが何回も出てきて、見終わったあとも頭に残りますよね。

今井——いすみ鉄道の黄色い電車が、菜の花のなかを走っているのを見たときに、あの灯台に菜の花を植えようと思ったのです。やはり千葉という菜の花というイメージもありますしね。

ちなみに、映画の中で太東崎に菜の花畑を作らせてもらったのですが、その後、実際に行った人から「何で菜の花がないのですか」と言われました。

木下——景観づくりに太東崎に菜の花を植えるというのがありますね。

司会——地元の人に継続していただくというのも手としてあるのかなと感じます。単発的ではなくずっと菜の花を育てていくなどありますね。

影山——『木更津キャッツアイ』も木更津の名前を使っていたので、地元でもとても人気がありました。特に岡田准一さんらが出ていたので、すごい人気でした。台湾でもあの映画は人気があり、私たちが台湾に商談に行ったら、「こういう人を知っているか」と逆に向こうの若い子から聞かれたりするぐらいでした。こんな風に盛り上がるのは

すごく嬉しいですね。

あのときは木更津に架空の床屋さんを作ったのですが、それが今も残っていて、みんなそこへ来て写真を撮っていくらしいのです。まさにロケ地が新しい観光資源になっているのです。

司会——そういうものが残り、観光マップに紹介されて、それが目的で足を運んでくれるようなことが続くと思いますね。

木下——韓国などでは、ロケ地を観光のプロモーションに活用していますしね。

ロケによって生まれる地域との絆

影山——ロケ地になるということは、ロケの際に何百人ものエキストラが来たりして経済効果があります。それだけではなく、地元の人たちがそのロケに参加したという満足感があり、さらに出来上がった作品を観て嬉しいという喜びがあり、加えてその映像がいろいろなところに発信されて、一粒で何回も美味しいという感じがします。

今井——地元の人との繋がりとということでしたら、今回のロケで外房の鵜原^{うばら}の民宿に長く滞在させていただきましたが、一カ月近くもいると、毎日のように旅館の方々から差し入れを持ってきてくださるようになりました。その時に、私が映画で表現したいことを自身で体験させていただきました。何十年前は必ずそういうご近所付き合い合いみたいなのがありましたよね。

司会——フィルムコミッションで撮影のお手伝いをするときに、エキストラを集めたりすると思いますが、その点で苦労話などございますか。

影山——たくさんエキストラが必要なきは、全国から人が集まってきます。集まってきた人同士が親しくなって、新しい交流ができることもあると聞きました。何日も続くロケだと、近くに住



■菜の花を駆け抜けるいすみ鉄道（写真提供 千葉県）



■映画『ポストマン』出演者と今井監督（左）
©2008「ポストマン」製作委員会



■海江田龍兵役の長嶋一茂と長女あゆみ役の北乃きい
©2008「ポストマン」製作委員会

んでいる方がだんだん自分のこととして感じてきて、ご近所のナントカさんみたいになったりするようですね。先日も一万人くらいを集めるロケがあつて、そのときは雨の避難場所の確保が必要で、私たちとしては大変な仕事でした。

司会——『ポストマン』ではたくさんエキストラを動員させた場面がありました、そのときのエピソードなどございますか。

今井——お祭りのシーンでは五、六〇〇人のエキストラを集めました。風が強くてロケが中止となつてしまったことや、天候の回復を待っていたことがあつたのですが、そうしたときに、地元の方が炊き出しをやってくださいました。また、お弁当の数がミスで足りないというときもあり、地元の方がおにぎりをこしらえてくださつてとても助かりました。

水澤——あのシーンは「本当のお祭りか」という問い合わせがありましたよ。

今井——あれはフィクションなのです（笑）。

ロケ地に県内各地の町を使わせていただいたので、なかなか特定のお祭りを彷彿させるようにはできませんでしたが、映画の舞台も架空の街「房総町」とさせていただけました。ただ、あのお祭りは、架空の街「房総町」の象徴的な映像を表現できればと思っていました。

千葉の魅力の再認識

木下——私たちが今やっているプログラムの房総半島活性化は来年で終わりののですが、そろそろ成果をまとめなければなりません。その際に、例えば『ポストマン』の上映会をして監督とさつき申し上げた共生環境、地域の振興策について話し合う。そういうのを千葉県のコンベンションが実施する。これはまさに房総半島活性化ですね。

千葉では臨海部や大都市部、柏とかは、アクティブティな街でNPO活動も活発です。千葉には地の利が良いところにも農村部らしさが存在します。そういうところに、東京の人が空き家求めてセカンドハウスとして移り住んだりしています。鴨川市の有名な大山千枚田保存活動は、まさに東京からの人を求めているところです。

千葉といえば海が思い浮かびますが、房総というのは山間部も含めてふるさとという魅力を確認できる場です。当たり前のことだけど、外から来た人はその良さがわかるのですが、『ポストマン』を上映するところで、そういうことの議論をやってみたらもつと魅力が明確になるのかなと思います。

水澤——アジア海洋映画祭イン幕張のときに「映画になった千葉の海」というテーマで、『ポストマン』『赤い鯨と白い蛇』『木更津キャッツアイ日本シリーズ』『バッチギ— LOVE & PEACE』『キャッチ ア ウェーブ』の全五作品を上映しました。残念ながら日程が合わず監督に舞台挨拶をお願いできませんでした。上映によって、ご覧になった方は地元の良さを再認識したのでしょう。その後に市民文化会館などでも『ポストマン』の上映会が開催されており、実際に、映画によって地元が紹介されてその良さを再認識したという声も聞きました。

千葉の食の魅力

影山——千葉はお酒もありますし、酒蔵もたくさんあります。

木下——いすみの木戸泉は伝統もあり、そして新しいことに挑戦しているがんばっている造り酒屋です。千葉には地酒がたくさんありますね。

水澤——千葉は食べ物が美味しいです。まず米が



■日本の農村の原風景をとどめる大山千枚田(写真提供 千葉県)



■鮮やかな断面の太巻きずし(写真提供 千葉県)

旨い、野菜が旨い、菜の花はお浸しにすると旨いし、魚も旨い。それなのに、食のアピールはもう一息という感じが常々しています。

木下——豊かな実りがある上に温暖で、地域の人にはあまり危機感を持たないから、自ら発信していくことに、がむしゃらにならないようですね。

影山——南房総市千倉町の高家神社は庖丁式が奉納されることで有名な神社で、日本で料理の神様を祀る唯一の神社と言われています。庖丁式というのは、大きなまな板の上で庖丁だけで魚をさばくを見せてくれるものです。千葉の人はそれをあまり知らないのですが海外に向けたメディアにもしばしば紹介していますし、海外からお客様を連れていくととても喜びます。

水澤——海外の人たちは千葉というよりも日本に来て、日本の情緒を味わいたいのではないでしょう。そこで、例えば成田空港の近くに、千葉の各地にある昔の農家や商家を紹介できる場があれば、他のツアーの際に寄ってもらい、日本の情緒を満喫してもらえないかと考えています。

木下——日本人の旅行はいろいろなところを駆け巡りますが、海外の人は滞在型でゆっくりのんびりするのが一般的です。民家や農村集落などを使いながらプロデュースしていくとよいのですが、日本の民家はほとんど壊されて無くなっています。海外から来た建築家がプロデュースして、それがうまく成功している事例があります。言わば、町家などを直しながら、そこを拠点にして滞在するスタイルです。勿論一カ所に集める方法もあるでしょうが、やはり日本らしさを感じてもらうには、集落に泊まれる場を用意し、来訪者を棚田などに迎え入れて一週間位滞在してもらう、そのような交流も楽しいと思います。そのような場が増えていけば、世界に通用する観光名所になってい

くのでしょね。

影山——それで、農村を気に入ってもらい、そこに住んでくださるとステキですね。千葉も東京に近い東葛に人口が集中している一方、房総半島の南部には藁葺き屋根の空き家が残っているところがあります。そういったものが、観光や地域活性化に利用できるとインパクトがありますね。

木下——以前、大喜などを調査しましたが、古い家屋の持ち主は年に一、二回来てはいますが、維持管理が大変でどんどん朽ちていくばかりで、もったいないと思いました。そういった家屋を観光に利用するにも、権利関係などを調整しながらでなかなか大変なのではないでしょうか。

影山——千葉には巨樹や古木がたくさんありますし、里山などもたくさんあります。そういうところを皆で守れるといいですね。

司会——実際に、田舎暮らしを支援するNPOもありますし、積極的に人を呼び込む取り組みをされている方がいますね。

影山——千葉には田舎暮らしと都市型観光の部分があります。空港はもちろん、幕張メッセやかずさDNA研究所など、いろいろなものがあるというのが千葉の魅力だと思います。

今井——次回作で一カ月ほど北海道に撮影に行きましたが、千葉は自然のスケールを見ても北海道に負けていないと思うのです。食べるものにしても、北海道は昔からジンギスカンとありますが、今はスーپرカレー横丁をつくって、それをまた売りにしています。売り方が上手ですね。その辺にこれからの千葉のヒントがあるような気がします。千葉の食べ物は何でしょうかと聞かれると、何だろうなと思ってしまう。

影山——有名なものはイセエビです。

木下——あと、太巻ぎずしがあります。断面がいろいろな絵になっていて、なかなかのものです。



■太平洋に面し約66kmの長さを有する九十九里浜（写真提供 千葉県）

メツカはどの辺なのですか。

影山——長生の辺りですね。

木下——実際に作ってみると、断面が絵になるまでが大変なのです。桜や椿などいろいろな絵があり、断面を想定して何度も巻いていくのはすごい技術ですよ。外国から来た人に見せるとびっくりします。

影山——G 20 グレンイーグルス閣僚会合のレセプションのときに太巻ぎずしを披露しましたが、断面にG 20と描いてあったのを皆さんが気に入って写真を撮っていました。千葉の人は皆が知っているのだから前だと思っているので、積極的にアピールしないのです。

木下——あれは意外と知られていませんね。ノリの生産地でもあるし、多分ノリの消費拡大か何かで考えられたのではないのでしょうか。あれは遊びみたいなところがあり、なかなか優れた食文化ですね。なかにはいろいろなものが入っているからヘルシーです。

水澤——千葉のイメージとして頭に浮かぶのは菜の花で、千葉を表現する映像によく使われていますが、知事は菜の花だけでは表せないと言っています。千葉はふるさとで、みんなの思いは一人一人違うけど、千葉に来れば何か自分とのつながりが見つけられる。良いところはみんな違うから、取って具体的なモノでイメージを表現しない方が良いという方針なのです。よって、去年から県の観光ボスターの主役は子供となっています。この絵で想いを感じてほしいということが、知事の願いだと思います。また、JRとタイアップして実施したデステイネーションキャンペーンから、ずっと子供を使っています。

影山——デステイネーションキャンペーンはJRと地元がタイアップしていろいろな地域でやってきており、冬の京都は有名ですが、関東でのキャ

ンペーンは少なかったのです。関東は人を送り出すところ、人を迎えるという意識がなかったのですね。千葉では初めてのキャンペーンで、県内の知らなかった部分が少しずつ発掘されてきています。こうしたきっかけでも国内外の方に千葉を知ってもらい、訪れていただきたいですね。

これから千葉への期待

司会——最後にこれからの千葉に期待することを一言ずつお願いします。

今井——個人的には自然が一番の魅力だと思えますから、自然といかに共生していくのかということです。日本の縮図という先ほどの話は、なるほどと思いました。過疎になっている地域もあると聞きましたが、逆にその辺が撮影的には魅力です。短い移動時間で、いろいろな場面に出会えて撮影できる。そういった点をまず全国の人に知ってもらうだけでも、それが魅力になってくると思えます。

木下——私は日頃考えていることが二つあります。一つ目は千葉は、東京に従属していて東京都千葉県のようなところがあります。NPOの自然環境を守る人や産廃の問題を考えている人から教わったのですが、年間約二〇〇万立方メートルという、東京のビル建設や埋め立てで使用される砂・砂利のほとんど（四分の三）が千葉県から供給されているそうです。千葉県の野山は東京の発展のために使われている半面、産廃王国などと言われ、現場では、豊かな自然の地にすごい不法投棄がなされており、NPOの団体も立ち上がっています。つまり、千葉県があって東京の発展が成り立っている。ならばいつそのことコバンザメのように東京の力を活用しながら活性化していくこと



■街づくりが進む幕張新都心（写真提供 千葉県）

も千葉の方向かなと思います。

もう一点は、日本の縮図だから、大都市は東京を向いているけれど、房総の先には向いていない。意外と東葛の人は房総の先のはうは知らない。しかし、知っている人にとってはとても魅力的で、それを満喫している。そこで、千葉県内の循環を促し、農村部を千葉の都市部の人たちが支えていく環境をこれからつくっていくことが大事だと思います。

水澤——実は、先頃第一回の千葉の観光検定が行われました。千葉県の人口は戦後二〇〇万人でしたが、この六十年間で三倍の六〇〇万人になっています。つまり、戦後になって、千葉に移り住んできた方がずつと多いのです。こうした現実から、千葉県のどこに何があるかをきちんと把握している人は少ないのではないかと思いますので、商工会議所が中心になって検定を実施したのです。第一回の受験者は約八〇〇名で、私も受験しました。

やはり、千葉に来てもらった人に対し、笑顔やさしいな施設は確かに大切ですが、それ以上にその土地を人に紹介できる、話して聞かせることが最高のもてなしだと思っています。きちんと地元のことを知るようになれば、千葉も人をお迎えする準備が整っていくのではないかと思います。まずは、そこから期待しています。

影山——千葉の自然は、暖かくて穏やかな自然、里山、里海だと思います。そういう自然がこれからもずっと続いていくよう、私たちも考えていきたいと思っています。また、たくさんの方に千葉の魅力を見ていただけるよう、私たちやフィルムコミッションが映像を通じて発信していきたいと思っています。さらに、県や市町村など、いろいろな機関と一緒に千葉をアピールしていきたいなと思っています。

最後に、観光関係の活動をしているNPOがとて増えています、先ほど出た田舎暮らしのNPOもそうだと思いますが、特に南房総ではそういう市民活動がすごく盛んになっていることを付け加えておきます。

司会——今日は千葉の多様な側面をお伺いすることができました。と、同時に今まで知らなかった千葉を再発見できた場になったと思います。出席者の皆さん、どうもありがとうございました。

今井和久 (映画監督)

一九六三年石川県生まれ。一九九二年、TBSの深夜ドラマ「PLAY ALONE」のひとりで見てね!」で演出家デビュー。一九九三年、テレビ朝日「七人の女弁護士」で連続ドラマ初演出。一九九四年、制作会社MMJ入社。その後もテレビ朝日「イグアナの娘」(一九九六年)、「ガラスの仮面」シリーズ(一九九七、一九九八年)、フジテレビ系「ルーキー」(二〇〇一年)、TBS「高原へいらつしやい」(二〇〇三年)など、数多くのテレビドラマを手掛ける。二〇〇五年、テレビ朝日「アストロ球団」で長嶋一茂と出会い、「ポストマン」が映画初監督となる。

木下 勇 (千葉大学園芸学部教授)

一九五四年静岡県生まれ。東京工業大学で建築を学び、一九七九〜一九八〇年にETH(スイス連邦工科大学)留学、一九八四年に東京工業大学大学院博士後期課程を修了し、遊び場のテーマで工学博士の学位を取得。大学院時代より、子どもの遊びと街研究会を主宰し、東京世田谷の三軒茶屋・太子堂地区で三世代遊び場マップ・図鑑づくりに従事し、住民参加、子ども参画のまちづくり



■南房総の鋸山から東京湾を望む



■千葉県地図

を進める。(社)農村生活総合研究センター研究員を経て、一九九二年より千葉大学園芸学部勤務。専門は都市計画、まちづくり、緑地環境管理学。UNESCO Growing Up In Citiesの日本コーディネーター。常に自分の足下でまちづくりをモットーに松戸小金地区のまちづくりにも関わる。

水澤千秋 (千葉県商工労働部理事)

栃木県生まれ、一九七四年千葉県庁入庁。二〇〇一年に商工労働部経営支援課長に就任して以来、現在まで商工労働行政に従事する。

二〇〇三年同部経済政策課長、二〇〇五年同部参事、二〇〇六年同部次長を経て、二〇〇八年から現職(観光担当)。

影山美佐子 (財団法人ちば国際コンベンションビューロー理事・事務局長)

千葉県生まれ。二〇〇一年財団法人ちば国際コンベンションビューローコンベンション部長に就任。その後、千葉県商工労働部観光コンベンション課長、千葉県環境生活部NPO活動推進課長を経て、二〇〇七年から同ビューロー理事・事務局長として、千葉県フィルムコミッションの運営のほか、コンベンション誘致、国際交流事業などに携わる。

司会 佐藤真理子、遠藤徹也(社)建設コンサルタンツ協会関東支部 広報委員)

街を育む ユーカリが丘の街づくり

林 新二郎（山万株式会社専務取締役）

三十九年目の街づくり

我が国における戦後から半世紀にわたる期間の都市計画及び住宅政策は、高度経済成長と終身雇用制、人口増加といった右肩上がりを前提として培われてきました。しかしながら一九九一年のバブル経済の崩壊以降、従来のそうした前提条件の回復は見込めないことが明白になったことから、持続的かつ継続的な街づくりシステムの構築に向けた議論が活発に行われるようになっていきます。

また、こういった傾向は、我が国だけではなく、欧米先進国においても「サステイナブルコミュニティ」あるいは「コンパクトシティ」をキーワードとして議論されているところですが、その議論の背景としては総じて、共通した五つのトレンド要因が存在しているものと考えます。

すなわち①「少子高齢化」②「高度情報通信化」③「環境共生化」④「地方分権化」⑤「国際化」といったトレンドですが、現代の街づくりにあたっては、それぞれが密接な相

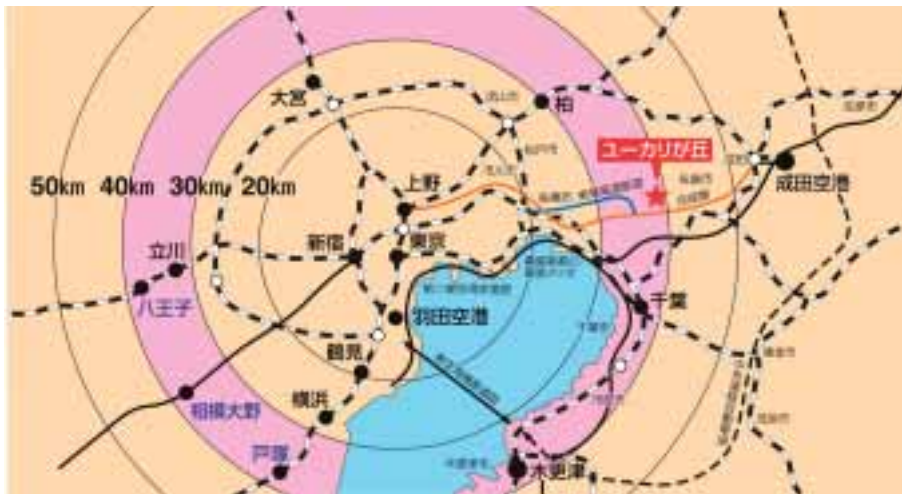
関関係をもっていることを前提に、各国特有の社会背景を踏まえて議論される必要があります。

日本における特有の社会背景としては、世界的に見ても稀有な「少子高齢化」があげられますが、「少子化対策」と「高齢化対策」は別モノとして議論されることが多いのが現状です。高度経済成長期以降、日本中につくられた「ニュータウン」が、「オールドタウン」化しつつある今日、「高齢化対策」として地域毎に介護・看護施設の整備が喫緊の課題となっています。「老・老介護」あるいは「認・認介護」の増加に伴って、ますます特定施設の需要は高まり、在宅支援システムの充実も求められています。こうした「高齢化対策」と同時に「少子化対策」が必要不可欠であると考えます。

「ユーカリが丘ニュータウン」は開発着手から今年で三十九年目を迎えるニュータウンですが、とりわけ、一九九七年以降、「少子化対策」と「高齢化対策」を一对の問題として捉え、同時進行でハードとソフトの



■写真1 佐倉市に広がるユーカリが丘



■図1 ユーカリが丘の位置図

整備を行って来ました。その結果として「住み続けられる街づくり」環境の構築を進めています。その基本的理念と取り組みを紹介します。

三位一体型街づくりの提唱

まず、「住み続けられる街づくり」いわゆるサステイナブルコミュニティの構築に向けては、当然のことながら、長期的視点が要求されます。

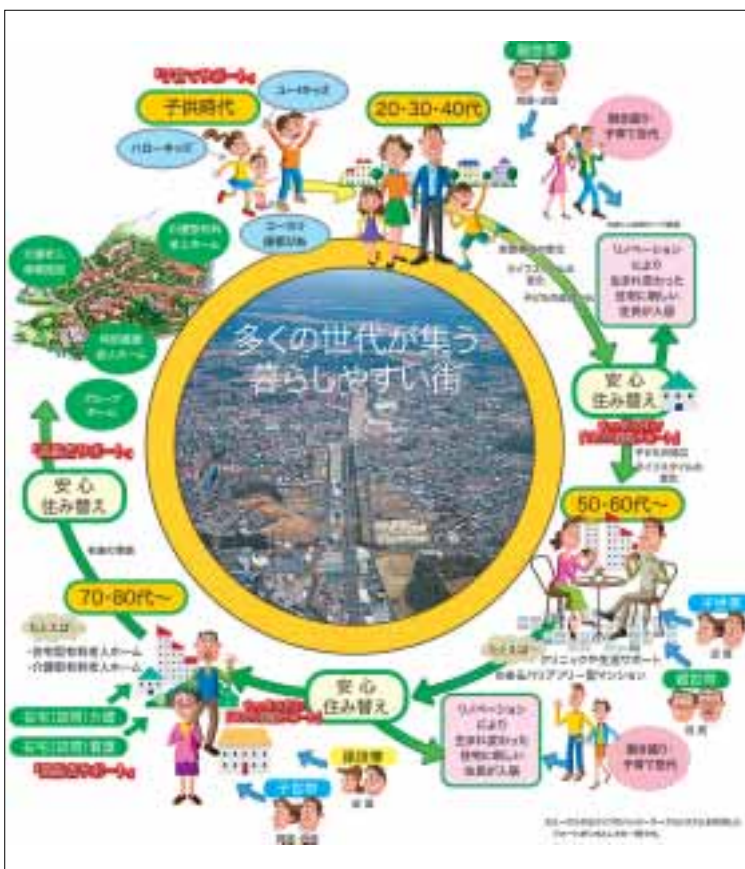


■写真3 毎年恒例のユーカリまつり



■写真2 ユーカリが丘の街並み

各自治体における「総合計画」や「都市マスタープラン」は約一〇年から二〇年程度を基本としています。サステイナブルな街づくりシステムを定着化させるためには、最低



■図2 リノベーションにより多くの世代が集う

でも三〇年程度の長期的な視点が要求されます。

なぜならば、三〇年間に社会構造は大きく変化し、コミュニティの構成要因も世代交代をするからです。三〇年間にその環境の変化に、いかに対応できる体質や企業風土を醸成し対策を打てるかが、企業の存続にかかわるといふ企業の三〇年説と同じです。ストロングポイント・ウィークポイントや企業環境分析をする能力をDNAとして保持している企業は五〇年、一〇〇年と存続し得るのです。街づくりにも同じことが言えます。

問題は、どこがそのコンサルタン

トやシンクタンクの役割を担うかということとなります。本質的には行政や自治体となりますが、分析能力、企画立案能力、実施能力のいずれも行政や自治体単独では制約と限界が生じ、結果的に画餅に帰す事例が多いのが実状です。

三位一体型街づくりを提唱する根拠はここにあります。三位とは住民（市民）、行政（自治体）、企業（ディベロッパー）を指します。昨今、街づくり三法の改正等の流れから、全国的に市民協働による街づくりが活発化しつつありますが、本来、地域での企業や商工業者の役割は高く、街づくりに、より積極的な参画

が求められています。とりわけ、ディベロッパーは社会的責任と役割も大きく、街の活性化にそのノウハウを大いに発揮すべきと考えられます。私共は「住民」・「行政」・「企業」との相関関係が「生産／雇用」・「所得／消費」・「収税／公共サービス」のサイクルを生み出すことにつながり、長期的な街の安定基盤としてのシステム構築になり得るのではないかと考えています。当然のことながら、ハードとソフトの両面での仕掛けづくりが必要となります。

「街の成長・管理」の実践

三位一体型の街づくりを企業（ディベロッパー）が、その一翼を担いながら長期的視点で行おうとする場合、営利企業である以上、企業の業績を安定化させる必要が生じてきます。またディベロッパーは開発エリアの分譲が終了してしまえば撤退し、次の開発エリアを求め続けるのが一般的であり、その方が合理的となります。事実、総じて他のディベロッパーはそうしています。街をつくるために企業の経営方針自体を変えた例を私は知りませんが、単に街をつくるだけであれば、そこまでの覚悟と決断は必要ではありません。サステイナブルなコミュニティを真剣に作るには、企業としての拡大一辺倒よりも、あえて安定化を選択し、長期安定型経営方針を持たねばなりません。そして、企業が地域に密着し、「街の成長・管理」を実践して

こそ、住民や行政との信頼関係を醸成することが可能となり、コミュニティビジネスとして成立してゆくのです。

今日の私共の事業内容は、開発事業、分譲事業、鉄道事業、テナント事業等がメインですが、その他に現地法人として、ホテル運営会社、アミューズメント事業会社、メンテナンス会社、建築・土木事業会社・社会福祉法人等を設立し、街全体を運営しています。開発・分譲事業により棚卸資産は減少しますが、毎年増えるテナントビルによって固定資産へのシフトを計り、更なる安定化につなげています。テナント事業は現在、大小合わせて一三〇店舗を超えています。地元商店会との共存共栄が街の活性化には必要不可欠です。街を活性化するために、あえて大規模小売店舗を誘致し集客を計っています。そして、中小小売店舗はその集客の流れをうまく掴む事によって相乗効果を得られるのです。

前述したように、ディベロッパーが地域住民のニーズを掴んだハード整備を行うことによって、パーソントリップは確実に変化し、「生産／雇用」・「所得／消費」・「収税／公共サービス」のサイクルを出来るだけ地元で発生させることが、結果的に地域住民の生活に還流していくのです。

少子高齢化への取り組み

三位一体によって循環型地域経済

システムを構築し、現代におけるサステイナブルコミュニティを創出しようとする場合、踏まえておかなければならない視点は、前述した五つのトレンド要因ですが、その中の一つ、「少子高齢化」対策に向けた取り組みについて紹介します。

少子化対策としては、一九九九年に園庭付き駅前託児所を開設し、二〇〇七年に学童保育施設を併設した高齢者グループホームを幼老一体型施設「ユーカー優都びあ」としてオープンしました。更に、子育て環境に重要なのが、「親育ち」という視点であるという認識から「総合子育て支援センター（ユーカーキッズ）」を駅前オープン致しました。ここでは認可保育所への入所条件に拘らず、親子あるいは家族同伴での来所を促進し、専門医師による子育て相談も開催しています。

また、二〇〇八年は千葉県初の民設民営型認可保育所「ハローキッズ」の増築を行って最大定員一二〇名とし、産休明け保育や病後保育などにも将来対応できるように充実させました。

一方の高齢化対策ですが、ニュータウンの隣接地の十五ヘクタールを「総合福祉の街エリア」と位置づけ、一

九九八年から整備を進めてまいりました。従来家族が生活基盤としてきたコミュニティエリアの中に、福祉施設を開設することが、サステイナブルコミュニティであるとの認識に基づき一九九八年、特別養護老人ホームの誘致、二〇〇〇年、クリニックスの誘致により、福祉の街の骨格を創って以降、社会福祉法人を設立し、二〇〇五年に介護老人保健施設「ユーカー優都苑」を開設し、二〇〇七年には、グループホームをオープンしました。

私共は少子化対策と高齢化対策は一对の課題であると捉えています



■写真4 幼老一体型施設としてオープンした「ユーカー優都びあ」



■写真5 総合子育て支援センター「ユーキッズ」

が、子育て支援と高齢者支援の両方の課題を同時に比較してみると、実は全くもって同じ側面にその問題点を内在していることに気が付きます。すなわちこうした社会資本ともいべき福祉施設の整備に向けた民間活力の導入です。PFI法や市場化テスト法の流れを受けて、いかに民活を導入できるか、又は運営面を含め民間にインセンティブを持たせられるかは、今後のこれら少子高齢化の諸問題の解決に向けたキーワードとなると考えます。

サステイナブルなコミュニティの追及

今後のユーカリが丘の街づくりについて紹介します。一つには新交通システムである「山万ユーカリが丘線」によってニュータウン内は全て最寄駅から徒歩一〇分圏内となっていますが、デマンド方式の「電気バス」を、補助交通として導入し、徒歩一〇分を出来る限り解消する構想が進行中です。もう一つは、ニュータウンのポリウムゾーンである団塊の世代を中心とした新たなニーズに対応するライフスタイルの提案として、日本版カレッジ型CRC (Continuing care retirement community) の実現に向けた取り組みです。アクティブシニアを中心としたニーズと超高齢社会の到来による環境の変化を大学教育とリンクさ



■写真6 新交通システム「山万ユーカリが丘線」

せて街づくりに展開しようと考えています。こうしたユーカリが丘の街づくりの考え方は、地方分権化の流れの中にあって、クラスター化する地方都市がコンパクトシティとしてのハード面・ソフト面のあらゆる機能を構築し、いかに自律した循環型地域経済システムをつくりあげられるかをテーマとしているからです。これを実践する中では、企業の経営効率だけを考えれば極めて非効率的な企業活動を伴うことにもなりますが、私共は「お客様相談室」だけではなく、住民や地元商店会の専用窓口をも設置し、日々その対応をしています。こういった活動によって得られる情報や、定期的に行っているユーカリが丘ニュータウン全世帯を対象としたアンケート調査・住民データは、日々変化する街をマネジメント

トする上で、今日では必要不可欠なものとなっています。

近年、不動産が金融商品化しファンドやリートによって、アセットマネジメントやプロパティマネジメントの対象となっています。こうした流れは、不動産を単体として捉えられがちであるのに対し、サステイナブルコミュニティをつくるということはタウンマネジメントを通して、街全体のアセットマネジメントとプロパティマネジメントを日常活動として行っていくことであると考えています。



林 新二郎 プロフィール (はやし しんじろう)

山万株式会社専務取締役
1959年千葉県生まれ。中央大学法学部政治学科卒業、
1983年山万株式会社入社、1995年取締役、1999年常務取締役、
2007年取締役兼専務執行役員就任。2008年4月より専務取締役

人を呼び込むいなかぐらし

堀内 英哉（NPO法人南房総いなかぐらし応援団）

海辺の八兵衛

南房総は、千葉県の房総半島最南端に位置し、房総丘陵を抱え三方を海に囲まれた海洋性の温暖な気候と美しい自然に恵まれ、特に、外房は冬でも暖かく霜が降りません。また、今年の夏を例にとってみても室内の最高温度が三十一度と過ごしやすいところです。

そんな南房総でのいなかぐらしを希望する方を支援する「NPO法人南房総いなかぐらし応援団」は、地元の建築、インテリア、漁業、コンピュータ、ファイナンス等の専門家が集まって平成十六年につくられた組織です。今年の四月には、外房の海岸にいなかがらし体験のための宿泊施設・海辺の八兵衛をオープンしました。私は海辺の八兵衛の管理人で、一年前に東京から夫婦で移住してきました。

海辺の八兵衛は、空き民宿を借り上げた小さな宿で、二泊から宿泊できます。ボランティアで、見学や体験指導、ガイドなども対応しています。



■写真2 民宿を借り上げた海辺の八兵衛の看板

す。
利用者のイメージするいなかぐらしはさまざまですが、約八割が全面移住を希望する方で、残りは別荘や



■写真3 美しい海はサーファーにも人気



■写真1 和田の里山、のんびりした懐かしい風景が広がる



■写真4 漁業と言えば、和田浦は捕鯨で有名

体験型の短期の滞在施設を探している方です。年齢構成では約六割が五十歳から六十歳代のいわゆる団塊世代。残りはこれから農業や漁業にトライしてみたいという三十から四十歳代の若い世代です。この世代はサーフィンなどの海洋レジャーを趣味

にしている人が半数を超えています。ここで管理人をしていると、いなかぐらしに関するさまざまな相談が持ち込まれます。

移住するのも簡単じゃない

東京から一〇〇km圏内と近いこともあって、当地に移住したいという方は多いのですが、いざ暮らそうと思うと、いろいろ問題もあります。

一つは、いなかぐらしの第一歩、住まい探しです。半数以上の方が貸家を希望しています。大金を投じていきなり移住するのは不安なので、とりあえず仮住い様子をみたいというのです。「家は古い方が面白い」「小さくてもよいから花や野菜が作れる畑もほしい」「こんな希望が多いのですが、これが問題です。売り物件は東京や横浜に比べるとびつくりするほど安いのですが、賃貸住宅は割高で数も非常に少ないのが現状です。空き家はあっても、見ず知らずの人になかなか貸したがりません。ただ、顔見知りになって気

ごころが知れてくると状況は変わってきます。「うちの隣りが空いたけれど借りてくれないかね」こんな話も出るようになります。

次は、いなかぐらしの第二歩、仕事探しです。こちらで仕事をしたいという人は多いのですが、企業が少

ないため求人がほとんどありません。一方で、農業や漁業は高齢化と後継者不足に悩んでいます。田畑では耕作放棄地が目立ち、海では漁船が余ってくる。農業や漁業は素人が手を出すにはハードルが高く難しい面も多いのですが、就労を支援する動きもあります。例えば、安房JAでは、この十月に説明会を開いて、県外からも応募者を募っています。結果として、かなりの新規就労者が決まったそうです。

また、移住してくる方からは時折こんな趣旨の話も出ます。

「いなかぐらしの収支バランスを評価するには価値観という変数を掛

ける必要があるのではないかな」

つまり、収入が減るデメリットを、生活様式の変化や充足感といった数字に現れにくいメリットで補うことが出来る部分があるのではないかな、ということ。ロハスとかスローライフという言葉はすでに定着していますが、それが、自分の生活ではどのような変数で評価出来るのか。なかなか答えの出せない問題です。

これは大変！することがない

さて、いよいよ住むところも仕事もどうにかなって念願のいなかぐらしのスタートです。ところが、せつ



■写真5 江見海岸の夕焼け、美しい景色に感動しつつも移住のシミュレーションは念入り！



■写真6 プロジェクターを使った星空研究会

かく移住はしたものの、そのうち二、三割ぐらいは、街に帰ってしまうようです。一緒にいろいろな問題を解決してきて、やっと移住にこぎつけた人が帰ってしまうのは受け入れ側にとっても由々しき問題です。帰ってしまう原因はほんとうにさまざまですがいくつか例を挙げてみましょう。

「安房は風が強くて寒い」

こんな理由でせっかく買った住まいを手放して帰ってしまうのか、と誰でも言いたくなりますが、かなり多い例です。南房総の気候は温暖ですが周囲は海です。地域によっては

強い風も吹きます。「素晴らしい眺めに感動して契約したけれど、風の日は雨戸を閉めても砂が入ってくる。とても住めません」ということになるですが、これは少々、調査不足です。契約するまでに、近くに古くから住む人に聞けばすぐ分かるのではないのでしょうか。

「買い物や通院が不便で生活できない」

車がないと買い物にも病院にも行けなのに、夫が倒れてしまった。とたんに免許のない奥さんだけでは暮らせなくなる。長期的な暮らしのシミュレーションも大切です。

また、人間関係では、地元の人との関係を心配する方が多いですが、実際はほとんど問題になりません。むしろ多いのは、夫婦間の温度差で、これは処方箋を誤ると大変なことになります。「定年まで我慢してきたのに・・・なぜ、こんな不便なところに越すのよ。苦労するのは私なのよ」こればかりは第三者が立ち入ることができない領域の問題です。

そして意外なところでは、移住してもなにもすることがない人もいるのです。苦労してやっと気に入った家を見つけて引越しも終わった。改装も庭の手入れも終わった。「さて、これから」というところで、ぼんやりしてしまう人がいます。よく考えたらなにもすることがないということです。そうなたら後は大変です。暇をつぶそうにも映画館も劇場もないウインドウショッピングもできません。そこで・・・



■写真7 安馬谷の稲刈体験、一仕事の後に記念撮影

くらしナビ安房倶楽部

そういった移住後の悩みを一緒に解決しようという思いから、この十月に「くらしナビ安房倶楽部」という会員組織を作りました。地元の住民と移住者の交流の場を提供し、こちらでの生活をより豊かなものにするものです。ぼんやりしてしまう人があまりに多いので、地元の事業家の協力を得て作りました。

安房の住民と移住者、観光客との交流、移住者同士の交流を目的とし

たもので、くらしのさまざまな分野のイベント活動を通じて会員の親睦を促進することを目的としています。どなたでも入会できて、入会金も会費もありません。食文化クラブ、森林クラブ、里山クラブ、ガーデニングクラブ、悠々クラブ、文化遺産クラブ、安房ガイドクラブ、マリクラブ、宿泊施設の九つのカテゴリーに分かれています。さらにその中には、分科会があって、会員は自分の趣味に応じて自由に分科会を立ち上げることも出来ます。

いくつか例を挙げると、食文化クラブには、採れたてと旬の食材にこだわって手作り料理体験や工芸体験を行う「カントリーマム」、マリクラブには、海のイメージを絵画や粘土で表現する「マリン美術の会」、文化遺産クラブには、南房総市の三芳、千倉の伊八の作品を研究し、保存に協力する「波の伊八の会」などの分科会があります。どうです、なかなか楽しそうですね。

最後に私事になりますが、私たち夫婦が東京から移住して約一年になります。その間、生活様式を変えてみた点がいくつかあります。まず、一番に挙げたいのは車をやめて自転車にしたことです。周囲の人も心配していたようですが、これで結構暮らしができています。確かに不便ですが、車のないスローな時間の流れの中に、いろいろ新しい発見があり楽しんでいます。皆さんも移住を考える場合には、世界で一つだけの自分サイズの暮らしの設計を楽しんでいただければと思います。

海辺の八兵衛の概要

<http://seaside-hachibei.sakura.ne.jp/>

くらしナビ安房倶楽部の概要

<http://minamibosonavi.web.fc2.com/>

【写真提供】

NPO法人 南房総いなかぐらし応援団



■写真8 里山クラブの活動



堀内 英哉 プロフィール

(ほりうち ひでや)

上智大学外国語学部卒

(有)セールスプロモーションデザイン

(有)VCAデザイン事務所

にて、代表取締役を務め、商業デザイナー、イラストレーターとして働く。

現在はNPO法人南房総いなかぐらし応援団の会員として海辺の八兵衛フォーラム代表を勤めている。

新たな観光資源としての

京葉臨海コンビナート

八馬 智(千葉大学大学院工学研究科助教)

近くて遠い京葉臨海コンビナート

千葉県は三方を海に囲まれた半島であり、極めて長い海岸線を有している。ところが、木更津よりも北の東京湾沿岸においては、海を感じるものがあまりない。それは、海岸線のほとんどが容易に人を寄せ付けないう人工の埋立地で構成されているためである。

特に、千葉港中央地区以南のエリアは広大な工業地帯であり、日本でも最大級の素材・エネルギー型産業の京葉臨海コンビナートが形成されている。そして、このコンビナートは分厚い緑地帯によって人々の生活環境と完全に分離されている。このため、京葉臨海コンビナートは人口密集地に近接しているにもかかわらず、市民生活においては、海岸線もろともほとんど意識されない存在となっている。

工場鑑賞の胎動

工業地帯に対する市民の眼差し

は、一般的に「環境破壊をもたらすもの」という負のイメージが先行していると考えられる。しかし視線を変え、現在静かなブームとなっている「工場鑑賞」というフレイムから眺めてみると、京葉臨海コンビナートは違った見え方になる。

二〇〇七年に出版された工場グラフィック鑑賞ガイド『工場萌え』は、発売から半年間で三万部以上を発行し、そのタイトルが流行語大賞にノミネートされるなど、大きな話題となった。このことは、工場の景観に魅力を感じているのは一部の特別な人だけではないことを端的に示している。

効率を追求した結果生まれた巨大で複雑な装置の偉観、空に放たれる水蒸気や陽炎のゆらめき、どこまでも広がる宝石箱のような夜景。そう言われてみると、コンビナートはなかなか面白い景観をつくり出しているように感じられる。かつての遠浅の海岸を原風景に持つ人にはなかなか理解されないだろうが、埋立地の海岸を原風景に持つ世代からすると、工場の眺めは悪いと決めつけ

れるものではない。このように、多くの人がこれまでほぼ無価値と思っていた景観に新たな価値を見出しはじめているという事実は、とても興味深いものである。

なお、このことは近年の動きに限ったことではなく、歴史の流れの中で必然性を有していることが、近畿大学准教授の岡田昌彰氏が提唱する「テクノスケープ論」の中で詳細に論じられている。

工場鑑賞ツアーの試み

このような背景のもと、二〇〇七年の秋に京葉臨海コンビナートの外観を眺めて楽しむという切り口で、千葉県と共同して「工場鑑賞ツアー」を開催した。これは、新たな価値観をどのように提供で



■写真1 生産性や安全性を徹底的に追求した形態には、結果的に多くの人を魅了する造形美が宿っている



■写真2 京葉臨海コンビナートは密度の高い植栽によって生活領域と分断されており、工場への眺望はほとんど遮られている



■写真3 工場鑑賞ツアーでは、製油所内の緑地で弁当を食べるという非日常体験を行った

きるのかを模索しながら、試行的に行った産業観光ツアーである。募集定員が三〇名のところ、予想を大きく上回る一六〇名以上の応募があったことや、新聞やテレビなどの各種メディアが取り上げたことから、この取り組みに対する注目の高さが伺える。

ツアーでは、協力をいただいた製油所と製鉄所の構内を、バスでゆっくりと巡回した。そこに見えるのは、様々な太さのパイプが縦横無尽に走る蒸留塔、野球のグラウンドが入るほど巨大な原油タンク、高さが一〇〇mを超える溶鉱炉、鉄鉱石による錆色の世界が広がる原料ヤードなどである。工場見学後は、ポートタワーでビールを飲みながらコンビナートの夕景を眺め、養老川海浜公園から光り輝く工場の夜景を楽しんだ。まさに工場づくしの一日である。また、企画段階から加わっていた『工場萌え』の著者である大山顕さんにツアーガイドをお願いし、移

動中も参加者に楽しんでいただいた。モニターツアー参加者からの評判はすこぶる良く、コンビナートが観光資源になることや、観光らしからぬ観光プログラムであっても成立することなどがわかった。また、このようなツアーは、コンビナートが彼ら自身にまとりついている負のイメージから脱却し、社会的役割に見合ったイメージを得る絶好の機会と捉えることができる。

観光資源としての京葉臨海コンビナートの問題点

工場鑑賞ツアー自体はとても素晴らしい成果を得たが、同時に問題点も浮き彫りになった。京葉臨海コンビナートは、良くも悪くも分厚い緑地帯によって世界が区切られている。豊かな緑の向こう側には魅力的な非日常の世界が展開しているが、それを垣間見る居心地の良い視点場は著しく少ないのである。このため、

企業の理解と協力なしに迫力のある景観体験を得ることは難しい。ところが、企業側はツアーによるメリットを実感する前に、戸惑いを憶えたようだ。それは、これまで彼らの中で工場の眺めを隠すことを良

しとする文化が長く続いているためである。しかし、経営の透明性が求められる時代においては、景観の透明性もまた重要な要素になるのではないだろうか。もちろん、安全性の確保や機密情報の保持という側面はあるにせよ、眺望の公開をCSRの一環として捉えることができるようになる、状況は大いに変わってくるだろう。

他地域においては、より積極的にコンビナートを観光資源化する動きが始まっている。たとえば四日市や川崎などの公害の歴史を背負っている地域では、負のイメージを転換することを目指したPR活動が行われている。宇部や周南などでは地域の活性化と観光資源不足の解消を図るため、ツアー・プログラムの開発に取り組んでいる。一方、それらの地域と比べて比較的新しく開発された京葉臨海コンビナートは、現状に対する問題意識があまり顕在化していない。このことが最大の問題点と言えるだろう。

再発見からはじまる再構築

工場鑑賞ブームに見られるように、これまで視対象と見なされなかったものが視対象として価値を持つようになってきた。それは、社会が成長から成熟に転換していることの現れなのかもしれない。

千葉県には京葉臨海コンビナートという膨大な景観資源が眠っていることがモニターツアーにより明らかとなった。今後は、それを積極的に

活かす手立てを構築していくことが望まれる。そのためには、企業のみならず自治体や地域住民も既成概念を取り払い、産業がつくり出す景観に正の価値を付与しながら、親近感の持てるコンビナートに育てていくことが重要である。こうして、結果的に郷土愛やものづくりへの敬意を呼び起こし、観光振興のみならず地域振興や産業振興にも好影響が生まれることを期待したい。

【参考文献】

『工場萌え』石井哲、大山顕、東京書籍、二〇〇七
『テクノスケープ―同化と異化の景観論』岡田昌彰、鹿島出版会、二〇〇三

【写真提供】

写真3―出光興産千葉製油所提供

八馬 智 プロフィール

(はちま さとし)



千葉大学大学院工学研究科助教
千葉大学工学部工業意匠学科卒業、
同大学院工学研究科修士課程修了
(株)ドーコン勤務の後、
千葉大学工学部助手、2007年より
同大学院工学研究科助教、
博士(工学)



6	5	4	1
7		3	2

坂東の原風景

宮ヶ瀬ダム

(神奈川県愛甲郡愛川町、愛甲郡清川町、相模原市津久井町)

広報委員会 館 紀昭

ダム開発の経緯

相模川では古くから河川総合開発が展開され、一九四七年には相模ダムが、一九六五年には城山ダムが完成し、京浜工業地帯を含む神奈川県内における水源として重要な役割を果たしてきた。だが、二ダムの完成後も追いつかない水供給や、元来氾濫原であった下流域の治水対策の要求が高まり、相模川水系で流域面積の大きい中津川においてダムによる洪水調節が計画された。

当初は「中津川ダム」として計画されていた宮ヶ瀬ダムは、一九六九年よりダム建設の為の予備調査が開始され、二年後の一九七一年より特定多目的ダム事業としてスタートし、計画発表から二十九年後の二〇〇〇年平成十二年）一月に完成した。関東地方では奈良俣ダム(群馬県・一五八・〇m)に次ぐ高さで浦山ダム(埼玉県・一五六・〇m)と並び、総貯水容量は奥多摩湖(東京都・山梨県・小河内ダム)や奥利根湖(群馬県・矢木沢ダム)に次ぐ関東屈指の大ダ

ムである。宮ヶ瀬ダムの主目的には、都市化が著しい相模川下流域の洪水調節、神奈川県下への上水道供給、水力発電などがある。

三枚の空中写真は、宮ヶ瀬ダム周辺の様子である。宮ヶ瀬ダム建設に伴う水没地の面積は四九km²、移転戸数は二八一戸に及び、一三六名の方々が移転を余儀なくされた。ダム完成後の写真では、ダム湖周辺の代替地に新たな施設が完成している様子が伺える。

建設におけるさまざまな試み

宮ヶ瀬ダム工事では、二〇〇万m³に及ぶ大量のコンクリートを効率的かつ経済的に施工することが最大の課題であった。このため、工事にはRCD工法が採用された。RCD工法とは、ゼロスランプの超固練りのコンクリートをブルドーザーで敷均し、振動ローラーにより締め固める工法である。宮ヶ瀬ダム建設における特徴としては、世界で始めてのダンブ搭載型のインクライン導



- 1 宮ヶ瀬ダム遠景
- 2 ダム本体コンクリート打設の様子 コンクリート打設は、RCD工法の採用で成果を発揮した
- 3 水没前の八丁の滝 中津川支川・早戸川に位置していたが、宮ヶ瀬ダムの完成とともに大部分が水没した【写真2、3は「宮ヶ瀬とともに 忘れえぬ郷土とダム建設に生きた人々の記録」建設省関東地方建設局宮ヶ瀬ダム工事事務所、H12年】より
- 4 空中写真 1971年【国土地理院撮影の空中写真(1971年撮影)】
- 5 空中写真 1997年【国土地理院撮影の空中写真(1997年撮影)】
- 6 空中写真 2005年【国土地理院撮影の空中写真(2005年撮影)】
- 7 観光放流の様子 放流中はダム直下に多くの観光客が集まる

入、超遅延剤の使用による品質保持等があり、様々な最新技術を凝らして施工された。

また、宮ヶ瀬ダムと相模川ダム群(道志ダム、城山ダム)との総合水運用を図るため、道志導水路・津久井導水路の二本の連絡水路が建設された。道志導水路は道志ダムの水を宮ヶ瀬ダムへ、津久井導水路は宮ヶ瀬ダムの水を城山ダムに送る水路トンネルである。この両導水路によって宮ヶ瀬ダムの貯留効果を高めると共に、相模川ダム上流ダム群を総合的に運用することで水資源の有効活用が図られている。

観光地として

首都圏から五〇km圏内と近距離にあることから、ダム直下に広がる神奈川県立あいかわ公園と共にハイキングなどが行える行楽地として、休日になると多くの観光客が訪れる。また、毎週水曜日と第二日曜日には宮ヶ瀬ダムの観光放流が行われ、高さ一〇〇m付近にある常用洪水吐きの二門のゲートからの放流が六分間、一日二回行われ、この時には放流を見るために多くの行楽客がダムの真下へ

と訪れる。

宮ヶ瀬湖は周囲の景観の調和や、地域に親しまれるダムとしての観点から評価され、神奈川県では丹沢湖と並び「ダム湖百選」(財団法人ダム水源地環境整備センターより)に選定されている。

宮ヶ瀬ダム周辺の今後

宮ヶ瀬ダムの完成により、観光客が増加し、地域は大きく発展している。新しく誕生した「宮ヶ瀬湖」という観光資源を、広く県内外の人々に利用してもらうと共に、今以上に森林・水質保全といった環境問題に対し、さらなる努力を重ね、水源地域の役割をしっかりと担っていくことが求められている。

【参考文献】

「宮ヶ瀬とともに 忘れえぬ郷土とダム建設に生きた人々の記録」建設省関東地方建設局宮ヶ瀬ダム工事事務所 H二二年

ダム諸元

名前	宮ヶ瀬ダム(みやがせだむ)
河川	相模川水系中津川
目的	洪水軽減、不特定、水道水、発電
型式	重力式コンクリート
堤高	一五六m
堤頂長	三七五m
堤体積	二・〇〇・〇〇〇立方m
流域面積	二二三・四平方km
湛水面積	四六〇ha
総貯水容量	一九三・〇〇〇・〇〇〇立方m
有効貯水容量	一八三・〇〇〇・〇〇〇立方m
ダム事業者	関東地方建設局
着手	一九七一年【昭和四十六年】
竣工	二〇〇〇年【平成十二年】



「美しい日本の歩きたくなるみち500選」 を歩いて

—小田原太閤一夜城公園コース—

広報委員会 木嶋 光宏



■出世坂からの眺望

十月下旬、「美しい日本の歩きたくなるみち500選」の一つである小田原の「太閤一夜城公園コース（3km）」のウォーキングに参加した。この「500選」とは、歩くことを通じて日本各地の様々な魅力を紹介し、観光立国や地域振興に役立てるとともに、車優先から人優先社会への転換を図り、健康やかゆとりのある社会の実現を目的に選定されたみちのことである。この事業は、国土交通省等の後援のもと、社団法人日本ウォーキング協会により実施されている。

土曜日の朝九時三〇分に小田原駅西口に集合。駅前には既に八〇人前後の参加者で賑わっていた。高齢者が多く、夫婦や友人・家族連れが目立つ。受付で参加証と地図を受け取る。コース

いよいよウォーキングスタート

最初に目指すは小田原城。今日の目的地である太閤一夜城のことを思いながら、小田原城の天守閣を見上げる。城を後に西海子小路へ。小田原文学館の前を通り過ぎる。さらに早川橋を渡り、東海道本線と東海道新幹線の高架をくぐる。ここまでは平坦な道であったが、いよいよ一夜城へ向けての長い坂道を上り始める。坂の両側にはみかん畑が続いている。天候は薄曇りであったが、徐々に汗ばんでくる。ふと眼下を見ると、小田原の市街地や海が広がり、その素晴らしい眺望が上りのきつさを忘れさせてくれる。この坂は「出世道」とも呼ばれ、石垣山に参陣し



■小田原城天守閣



■一夜城の展望台からの眺め



■コスモス畑で海を見ながらの昼食



■美しい日本の歩きたくなるみち
500選のサイン



■小田原城内



■一夜城を後に、ゴール地点に向かう



■一夜城の石垣



■石垣山に参陣した武将たちの看板



■西海子小路

た伊達政宗や徳川家康などの豊臣秀吉ゆかりの八人を紹介する看板が随所に設置されている。これらをベースの落ちてきた人々と一緒に見ながらゆっくりと上っていく。

正午前に一夜城に到着。一夜城は国の指定史跡で歴史公園となっている。さすがにお腹がぺこぺこなので、コスモス畑で海を見ながら、持参したおにぎりを頬張った。美味しい。こんな昼食もウオーキングの楽しみの一つと言えよう。一服し城を見学。一夜城とは、豊臣秀吉が一五九〇年の小田原征伐の際に、小田原城の西三kmにある笠懸山の山頂に構築した石垣の城である。小田原城から見えないように密かに築き、完成後に周囲の樹木を伐採し、一夜にして築城されたかのように見せたことから、その名がついたとされる。急な城の出現に北条氏側は驚き、戦意喪失となったそう。さすがに石垣は崩れているが当時の面影が偲ばれる。展望台から秀吉になった気分、小田原城を見下ろしたが、樹木が邪魔して見えない。しかしかえって想像力をかきたてられ、当時に思いをはせる。

一夜城を後にして、終着地である箱根登山鉄道の入生田駅に向かう。これからは下り坂。だんだんと足がだるくなってくる。途中、採れたてのみかんが路肩に置き売られていた。六個一〇〇円。代金を料金箱に入れ、早速、渴いた喉を潤す。堅くて小ぶりだが口の中にすっぱさと甘

日本ウオーキング協会のウェブサイトには、「健康に効く」「交流に効く」「教育に効く」「環境に効く」「観光に効く」の五つの効用が紹介されている。人の体は、歩かなくなると異常をきたし、逆に歩けば正常な状態に戻るようになっている。また、共に歩き並んで歩くことで、心が通じ合い、家族の絆を深めたり、世代間の交流やコミュニティの繋がりを促し、心のふれあいに大きな効果をもたらす等の様々な効用があるそう。現に今回参加して日頃の残業疲

ウオーキングが人と社会にもたらす効用

さが拡がり疲れを癒してくれる。この感覚も参加しなければ味わえなかったことだ。こうして自然や秋を感じながら、太閤橋を渡りゴールした。



■一夜城の本丸跡への道

れが取れたような気がしたし、何よりも、家族や友人、グループで参加している人々の表情が明るかったことがそれらを証明していると思う。さらに車を使わずに歩くことは、大気汚染や地球温暖化の抑制につながるといふ環境面での効用もある。今回様々な効用を体感したが、中でも一番強く感じたことは、「車では見えなかった地域の魅力が、歩く目線に帰る時にはじめて見えてくる」ということである。歩けば五感で知る感動や再発見があるというが、今回坂の途中から汗をかきながら見た眺望はまさにこのことであると思う。あの眺望は車からも見ることはできないであろうが、それは一瞬であり、体で感じることはできない。歩いてはじめて地域の魅力を感じることができるといふことを実感したウオーキングであった。



■一夜城全景



株式会社建設技術研究所
東京本社 都市部 副参事 楊 雪松さん

橋脚の周辺堤防へ及ぼす レベル2地震時の影響検討

発注者：関東地方整備局

安全性・耐震性・経済性の向上に着目した柔構造技術を目指して

若松 自己紹介をお願いいたします。
楊 東京本社都市部に所属している楊と申します。平成七年に株式会社建設技術研究所に入社しました。入社以来一三年間、柔構造技術の開発と土木構造物に適用するための設計法の開発、それらを活用した構造計画・設計実務に携わってきました。

案は今回が初めてですが、これまでの研究ノウハウの延長上で提案しました。その成果を発注者からも評価していただき本当に感謝しています。

若松 弾性接合方式のPCBOXとはどのような構造ですか？
楊 弾性接合方式のPCボックスは、隣接するPCボックスの接合部に弾性材としてクロロプレンゴムをはさみ、長手方向にPC緊張材で緊張、全体を一体化させると共に、接合部に弾性変形能力を確保するものです。橋脚が堤防断面面に入る場所では、橋脚は剛性が高く、固有周期が短いと、地震時に小さい振幅で激しく揺れます。一方、河川堤防はゆるやかなため、固有周期が長く、地震時にゆっくり大きく揺れます。小さく揺れる橋脚と大きく揺れる堤防

との接触面に発生する連続した空隙は、浸透流の経路となり河川堤防にとって大きな脅威となります。

弾性接合方式のPCボックスによる鞘管は、鞘管の輪切り方向に多数の接合部を有するため、地震時周辺堤防の水平方向変位にシナやかに追従していきます。そのために、地震によって揺れている間も、大きな隙間が生じず、強い地震動から堤防の被害を防ぐことができます。

若松 具体化する上でどのような課題がありましたか？
楊 もっとも大きな課題は接合部ゴムの非線形弾性特性と、ゴムのせん断変形が卓越する特性を設計法に反映することでした。プレキャストボックスと接合部のゴム、長手方向に圧縮する緊張材を挿入した構造の評価法は、プレキャストボックスを剛体梁、接合部ゴムを非線形ばねとして、弾性床上の連続剛体梁にモデル化し、基本方程式を導きました。

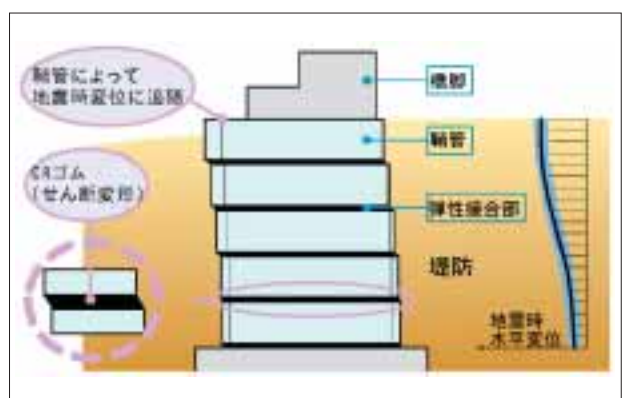
若松 コスト面についてお聞かせください。
楊 詳細設計の段階にならないとコスト面での比較は難しいところがありますが、市場調査結果によれば、鋼管より三〇%程度のコスト削減を十分達成できます。

若松 土中にゴムを埋設した場合のメンテナンスや耐久性についてはどうでしょうか？
楊 接合部に挟むCRゴムは、例えば橋梁におけるゴム沓や管路の継手等に用いられている可撓継手等、土木構

造物にも広く採用されており、その耐久性も確認されています。ゴムは、紫外線やオゾン等で劣化が促進することが知られていますが、地中構造物ではこの点も有利になります。

若松 最後に設計技術者として後進の方への技術の伝承や教育については。
楊 コンサルタント業界は、外国人・女性などすべての技術者に門戸が開かれている業界であり、これからチャンスはより広がるのではないかと考えています。

若い人も幼い頃の好奇心と探求心を忘れずに、自由な発想と厳密な論理を日常の業務に取り組んでいれば、誇りを持てる仕事ができると思います。



■弾性接合方式鞘管のイメージ図と地震時の挙動

こころのバリアフリーを目指して

若松—それでは自己紹介をお願いいたします。

別府—地域計画部に所属している別府と申します。平成九年入社の人社一二年目になります。主に、バリアフリー、ユニバーサルデザイン、景観などを専門にしています。

若松—今回、関東地方整備局から局長表彰を受けられたご感想は。

別府—私は特に市町村のバリアフリーに係る業務が多かったのですが、そこから国土交通省の仕事へ発展して更に局長表彰をいただいたということに大きな意義を感じ大変うれしく思っております。

今回の業務は、大宮国道事務所管内における歩道等の施設の取り巻く状況を把握して、歩道整備計画等の調査・検討を行った上で歩道の設計を行う業務です。

歩道の中でも通学路の子供の安全を図る通学路の整備を検討しました。

ハード面で整備できても誘導ブックの上に放置自転車があったりと、意味を成さないことがあります。ハード、ソフトの両面が必要で、つまり心のバリアフリーが大切なんです。更に、防犯、交通安全、防災もそうです。こちらも最後に頼るところは地域のコミュニティに行き着きます。

若松—バリアフリーとユニバーサルデ

ザインの違いをご説明ください。

別府—バリアフリーの考え方はバリアを取り除くことですが、取り除き方にもいろいろあつて誰にでも利用しやすいものにするのがユニバーサルデザインだと思います。ですからバリアフリーはユニバーサルデザインの中に包含されるものだと思います。バリアフリーの計画をする上でもユニバーサルデザインの考え方を常に持っています。それは計画設計の当初からの理念です。どちらかというと予防的な考え方です。

若松—今までのご経験の中から協働作業についてお話をいただけますか？

別府—ワークショップを開催して、参加者の方と協働作業で作っていくことは大切です。

空港などの例では、外国人の方に入っていたら実際に困っていることなどの意見を引き出すこともやっています。また、自転車のモデル地区では、自転車による事故などが多いので、自転車を利用する人に意見をお聞きしたり、また参加していただくことにより啓発を行うこともしています。

この空港でのユニバーサルデザインの実証実験結果は手引書として全空港に配布、紹介され役立てていただきました。

ワークショップには障害者の方にも参加いただくことがあります。車椅子の方と視覚障害の方とトレードオフの関係になることがあります。歩道の段差は視覚障害の方には



八千代エンジニアリング株式会社
総合事業本部 地域計画部 担当課長 別府 知哉さん

協働による取組みでひとにやさしい社会づくりを推進

車道との区別が必要ですし、視覚障害の方には障害になります。

こういった問題をその場所々々の特性で確認し、話し合つて決めていくことが必要だと思います。

若松—今後更にどのように発展していくのでしょうか？

別府—仕様は統一すべきで障害者の方がどこに行っても使いやすいものでなければならぬといえます。しかし、ここでローカルルールとバッテリーングします。

ワークショップはローカルルールの視点を関係者協働で考える良い機会だと言えます。地域性を考慮して基準やガイドラインを運用していくことが、今後の設計者や管理者に求められると思います。



■これからの道路整備では地域の方と一緒に考える機会を設けることが大切です

若松—後進の方にアドバイスを。
別府—ニーズに対して売れる技術を持つて企業の看板ではなく個人の看板で仕事が来るような技術者になつて欲しいですね。

支部紹介 関東支部 活動紹介

昨年は関東支部創立四〇周年を迎え、四〇周年記念事業実行特別委員会は記念事業の一つとして「技術者フォーラム（これから会社資本を考える）」を十月二十四日、発明会館ホールにて開催する企画をしました。これに先立ち、

懸賞論文「建設コンサルタントとしての夢を語る」を若手社員に公募したところ、四〇編が応募され、査読委員会の厳正な審査を経て最優秀賞一編、優秀賞四編が選定されました。

技術者フォーラム当日は開場前

から激しい雨模様となりましたが、約に二〇〇名の会員の皆様にご参加いただき、友澤武昭支部長の挨拶後、懸賞論文の表彰式に移り、小竹査読委員長より審査結果が報告され、支部長より受賞者五名の方に賞状と副賞が贈呈されました。

基調講演は、「強い美しい日本 これからの社会資本整備」のテーマで関西大学政策創造学部教授の白石真澄氏が講演されました。これに続き、「成熟社会における建設コンサルタントへの期待と夢を語る」につ



■ 表彰式

いてのパネルディスカッションが、国土交通省環境安全・地理空間情報技術調整官の溝口宏樹氏、東京工業大学教授の藤井聡氏、日経コンストラクション副編集長の高橋秀典氏、パシフィックコンサルタント（株）情報部長の町田聡氏、（株）建設技術研究所河川部長の西村達也氏の若手の有識者によって行われました。なお、コーディネーターは林勝巳支部理事・技術部会長が勤めました。

最後に、中野佳記副支部長の閉会挨拶をもって、盛況のうちに終了することができました。



■ 基調講演 白石真澄関西大学教授



■ パネルディスカッション

事務局だより

関東支部は平成二〇年に創立四〇周年を迎え、いくつかの記念事業を進めています。昨年十月二十四日には技術者フォーラムを盛大に開催し、今年一月には記念誌発行を、一月一日には記念式典・記念講演・祝賀会を予定しています。四〇歳の区切りとなる有意義な事業となるよう念じています。

ところで、関東支部は事務所を神田に移転して早や二年経ちました。駅から徒歩五分、皆様もやつと慣れて「今、神田駅にいますのが事務所にはどうやって行けばよいのですか？」の電話が、お陰さまで少なくなりました。皆様の会議室使用は殆ど三時～五時に集中し、その後は「五時から会議」を外で催されているようですが、神田駅までたどり着くのに何時間も掛かっているのではないのでしょうか。

神田は昔からの下町、旨くて安い食べ物屋や飲み屋も多く、誘惑に駆られます。事務所の二軒先の蕎麦処「浅野屋」では、毎年八月の祭りには神田中の蕎麦汁を揃えて食べ比べ会が催され、蕎麦好きが長い行列を作ります。お好きな方は是非一度お試しあれ。

地域委員会だより～千葉地域委員会

今回は冒頭の千葉特集に因んで、千葉地域委員会よりちょっとした千葉の一面を紹介させていただきます。房総半島の南部に足を伸ばすと、道路沿線に「鯨のたれ」と書かれた看板や幟をしばしば見かけます。皆さんは「鯨のたれ」と聞いて何をイメージされますか？実は、南房総に江戸時代から伝わる伝統的なクジラの食べ物で、クジラ肉を手の平より少し大きめにスライスし、醤油や塩をベースとした独特のタレで一晩漬け込み、天日で干したもののなのです。見た目は、黒く一見ビーフジャーキーにも似ているような気がしますが、柔らかく、少し生な部分が残っているのが特徴です。最近ではネット販売もされているため、既にご存知な方も多いかと思います。味については、これがまた珍味で、少し鯨らしいクセはあるものの、家畜系のジャーキーとは違いその柔らかさは、脂肪の無い赤身の肉に近く、濃縮された味と風味を感じることができます。私もよくお土産で利用させてもらいますが、かなり評判が良い品の一つです。

さて、食い意地が先行してしまいましたが、そうです、千葉県では現在でも捕鯨をしているのです。ご存知の通り、IWC(国際捕鯨委員会)で商業捕鯨は禁止されているのですが、これとは全く別の枠組みで日本政府が管轄して小型沿岸捕鯨が合法的に行われているのです。この捕鯨は全国でもこの千葉を含めて4箇所しか行われておらず、古くから、鯨漁と暮らしが密接に関わり合ってきた千葉(南房総)の特色の一つと言えます。しかし、社会の需要の変化や捕鯨禁止の気運の高まりから産業として成り立たなくなり、聞くとところによると、今では、捕鯨船の先についた大きな鉈を打つ漁師さんは日本中でも数人になってしまっているそうです。

これまで、広く庶民の台所を支えてきた日本の食文化をこの千葉で体験してみるのも良いのではないのでしょうか。

千葉地域委員会 委員 川端喜作(株式会社 道路建設コンサルタント)



■「鯨のたれ」製造所



■天日干しの様子

編集後記

◇リニューアルした支部報の第二弾ということで、“多様な「表情」を持つ千葉”をテーマに、その魅力について特集しましたが、千葉のポテンシャルの高さに正直驚きました。これからはそれを上手くPRして活かす仕組みづくりが求められていると思います。今回は、「LOHASな土木」の取材でウォーキングに参加しました。学生時代には部活で体を動かしていましたが、最近はただ休息するばかりでした。今回歩いてみて、いろんな効用を再認識しましたが、これからもウォーキングに参加し、心身共にリフレッシュしたいと思います。(木嶋)

◇本号の企画を通して、今まで知らなかった千葉に出会うことができました。美しい海に、ノスタルジックな鉄道、象に乗れる動物園、捕鯨、身近にこんな場所があったのかと驚かされます。うーん、住んでみたくなる気持ちもわかるなあ。(浅野)

◇今回、千葉市出身の俳優・永島敏行氏には、農業や自然を通した子育て論や交友を始めとする多くの話をいただいた。それら「土」に対する思いは、私自身に土木を見つめ直す時を与えてくれた。感謝の一言である。(稲田)

◇千葉は想像以上に多様な表情を持ち、その風景や食が我々に送り出されていることに気が付きました。今まで、それがあまり認識できていませんでしたが、これからは意識して千葉を実感したいと思います。(遠藤)

◇特集で訪れたユーカリが丘はとても魅力的なまちでした。デベロッパーの理念、取り組みが長期持続的な成長・発展を支えていることがわかり、これからの日本のまちづくりに必要なあるべき姿がみえたと思いました。(加納)

◇今回は“千葉”ということで、頭に浮かんだのは映画等で映し出された『多様な千葉の顔』！そこで、新米ながら見よう見まねで座談会を企画し、参加者の皆様や他の委員の御協力により、何とか実現することが出来ました。(佐藤)

◇関東に移って日も浅く、関東地方のさまざまな魅力に触れるいい機会となりました。宮ヶ瀬ダム取材ではちょっとしたハブニングもありましたが、巨大構造物が悠然と佇む姿に日本の土木技術の高さを改めて感じました。(館)

◇昨年同様、建設コンサルタントとして働く2人の技術者に直接お話しをお聞きすることができました。そのインタビューでの印象は、技術に自信を持ち、更に夢と誇りと向上心を持っていることを目から感じたことでした。(若松)

【グローバル関東 制作者】

広報委員会

委員長	木嶋 光宏	八千代エンジニアリング(株)	委 員	加納 肇	いであ(株)
副委員長	浅野 泰弘	セントラルコンサルタント(株)	委 員	佐藤 真理子	(株) オリエンタルコンサルタンツ
委 員	稲田 栄作	東京コンサルタンツ(株)	委 員	館 紀昭	日本上下水道設計(株)
委 員	遠藤 徹也	大日本コンサルタント(株)	委 員	若松 孝至	(株) 建設環境研究所

グローバル関東 Vol.2 January 2009

発行日 平成21年1月1日発行

編 集 広報委員会/技術委員会

発 行 JCCA 社団法人 建設コンサルタンツ協会 関東支部 〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-10 松楠ビル4階

Phone…03-5297-5951 Fax…03-5297-5952 <http://www.jcca-kt.jp>

レイアウト制作印刷 株式会社 大 應



JCCA
関東支部